

今年もしつこく大相撲観戦雑記
＜平成24年初場所を終わってひとこと＞

関係者の方や応援されている方には大変申し訳ない表現になってしまうが、この場所の印象は一言でいえば「思いがけない結果になってしまった」としか言いようがない。まずは気になったことや気がついたことを書きなぐって見る。初場所の印象レポート以外に「大相撲改革への提言」も含めて。

＜1＞ 思いがけない結末

場所前から白鵬の22回目の優勝を想像していた人が殆どだと思し、場所の進展を見ても誰もが信じて疑わなかったに違いない。

白鵬の相撲は、低い腰の構えからの鋭い立ち合いで相手の腰を浮かせてしまい、素早い寄り身で土俵の外まで一瞬にして運んでしまう「旨さ」「強さ」「速さ」が光る取り口だった。まさにすり足を地を這うような体の運びは美しささえ感じられた。

白鵬に最初に土を付けた鶴竜の攻めは完璧だった。今の白鵬を攻めるのにはこれしかないと言える攻めだった。鶴竜は、白鵬攻略の術を日々考えている何人かの力士の中の一人に違いない。

一方、賜杯を手にした把瑠都の相撲は粗雑で大雑把なもので、まさか優勝にまで到達するとは想像すらできるものではなかった。特に前半の相撲は、いつ連敗が始まるのかと心配させるような危ない相撲ばかりだった。その中で「自分には体があるのだから、遮二無二前に進めば勝てるのだ」ということを見出したのがきっかけとなって後半戦に想定外の実績を上げてしまった。

毎日の取り組みを見ての印象からすると、白鵬は鶴竜戦もしくはその直後のいつかの相撲で肩・腕・腰のいずれかを痛めたのではないかと思う。後半戦の敗戦の形を見ているとどうもそんな感じがする。

＜2＞ 若手の台頭が面白い

十両・幕内を通じて新しい顔ぶれが見えてきた。

十両では今場所の優勝は千代大龍、先場所は勢と、このところ「新十両の優勝」が続いている。優勝力士以外にも、双大竜・旭日松・琴勇輝などの気持ちのいい相撲を取る力士が目立ってきた。勢は今場所も10勝5敗の好成績で、来場所の新入幕が予想される。

幕内でも、千代の国、松鳳山、妙義龍、天鎧鵬、佐田の富士などが目立った活躍をした。これらの力士の少し上には、富士東、碧山、高安、臥牙丸などがおり、その上には栃の若・隠岐の海らもいる。この中でどの力士が抜け出してくるのが楽しみである。栃煌山や豪栄道らはもたもたしていると追い越されてしまうかもしれない。

そんな意味でも、幕内下位と十両は「次の時代」を睨んで目が離せない状況になってきた。

＜3＞ 基本に忠実なのが気に入った

ここ数場所の相撲を見ていて気がついたが、「相撲の基本を身に付けている力士」と「基本を身につけていない力士」がはっきりしてきた。

低い腰の構え、割れた膝で前傾姿勢とすり足で攻めて行く妙義龍は、相撲の基本をきちんとマスターしている感じが見える。千秋楽に鶴竜に破れ、惜しくも9勝6敗に終わったが、技能賞を獲得した。妙義龍の相撲は「相撲らしさ」がそこかしこに漂っており、見ていて気分が良い。

松鳳山は土俵に上がると毅然とした古武士のような面構えになり、いささかのけれん味もない突きと押しで攻めていく。妙義龍とともに「前進型」の相撲で好感が持てる。

佐田の富士の押し相撲、千代の国の素早い攻めも腰が下りて安定した位置からの動きで、前記の二人とともに絵になる相撲である。

叩き込みをするために突っ張りをしているだけの若荒雄や、脇を締めることなく横からガバとまわしを取る栃ノ心や阿覧の相撲とは違う、基本に忠実でしかも味のある相撲のスタイルを持つ若手が

できたことは喜ばしいことである。

< 4 > 綱取り・大関取りと騒ぐな

把瑠都が優勝したことでまた「綱取り」騒ぎが起きることになった。

「大関で二場所連続優勝またはそれに準じる成績」を上げた場合、推薦検討の対象になるということになっており、もうひとつの着眼点として「品格・力量ともに抜群であること」と言われている。ところが、蓋を開けて見ると「二場所連続優勝またはそれに準じる成績」だけで必要充分条件が整ったかのような騒ぎが始まることが多い。

若くして将来を期待されて歴史に残る大横綱二人の名をいただいた双羽黒は、横綱昇進後に不祥事を起こして廃業に至った。この頃から「品格」が話題になるようになり、朝青龍の時には土俵上のマナーを指摘する例もあった。

「品格」を評価することは難しいことではあるが、横綱という地位は綱を締める（神の領域に近づく）ことと考えれば、相撲の技・力以外に「人間力」を求める必要があるだろうと思う。人間が人間の品格を評価してふるいにかけるのは至難の技であり、その尺度を用意することも難しい。

直前二場所の瞬間的な出来事を評価するのではなく、過去一年ぐらいの成績を評価することにより、「長きにわたり安定した成績」をあげ、「地位に甘んじることなく精進」を重ね、「自らの向上に努める」姿勢がうかがわれるかを間接的に評価し、その中に「品格と力量を見る」ということになるのかもしれない。

そんな訳で、横綱昇進推薦の基準として「過去一年の成績」と「大関在位期間中の成績」の二点を加えることを提言したい。

把瑠都が来場所優勝またはそれに近い成績を残すと、「二場所連続優勝で力量の評価は良し」と考えて、昇進ムードを掻き立てる動きをする人と、時期尚早を表現する理由として「品格がねえ・・・」と意味のわからないコメントを付ける人が出て来て、またそれをマスコミが面白おかしく取り上げて騒ぎ立てるのではないかと心配している。個人的な見解としては、「大関という地位の成績としては今ひとつの感が拭えない」のが正直な印象。

鶴竜が関脇在位を続け、二場所連続で10勝5敗の成績を収めた。ここでも「大関取り」の騒ぎが予想できるが、大関昇進についても「直前6場所の成績」を評価対象とすることでより良い選考の仕組みに移行することを進言したい。今のままで行くと大関乱造になり、質の低下をきたすのは目に見えているので、まずは大関選考基準の改定を、そして横綱推薦基準の改定を促したい。

◆参考情報①：把瑠都の成績

H23-初 (大関)	H23-5月 (大関)	H23-7月 (大関)	H23-9月 (大関)	H23-11月 (大関)	H24 初 (大関)	六場所合計
9勝6敗	10勝5敗	11勝4敗	10勝5敗	11勝4敗	14勝1敗	65勝25敗

大関在位 10場所 103勝47敗 (勝率 0.687)

◆参考情報②：鶴竜の成績

H23-初 (小結)	H23-5月 (関脇)	H23-7月 (関脇)	H23-9月 (関脇)	H23-11月 (関脇)	H24 初 (関脇)	六場所合計
8勝7敗	12勝3敗	10勝5敗	9勝6敗	10勝5敗	10勝5敗	59勝31敗

< 5 > ふんどしを締め直せ

琴奨菊のまわしはいつもきつく締められている。相手にまわしを取らせないための策だと聞いたことがあるが、あの過剰な締めつけ方は体の為にも良くないような気がする。横から眺めるとその無様さがうかがえる。相手にまわしを取らせないようにする対策は、まわしの締めつけ方に頼るのではなく自分の出足と前さばきで解決した方が良いのではないかと思う。ただ、このことが幸いしてか、彼の土俵でまわしが緩んだ姿は見たことがない。

栃ノ心は一見してきちんとしているように見えるが、まわしの最後の一巻きと結びが緩いようだ。相手がまわしを掴むとゆるゆると上に向かって伸びて行き、やがて結び目近くまでが怪しくなっ

来る。初場所の土俵の中でも頻繁に、相手が取った一枚まわしが緩んで伸びて行く場面が見られたし、結び目がほどけた場面も何度か目撃した。外国人力士特有の「ふんどし嫌い」によるものなのか、相手に一枚まわししか与えないためにやっていることなのか、定かではない。

まわしの締め方では最悪の力士が臥牙丸。締めつけ不十分な上に前も後もゆるゆるなので、テレビに映るのには問題があるような光景を何度か目撃した。相手がまわしを引くと栃ノ心以上に伸びた一枚まわしになる上に、激しい攻防になると人体として最も隠すべき二か所が頻繁に怪しく見え隠れする。何場所か前のNHKの放送中に解説の北の富士さんが「師匠が注意しないのかね、まずはふんどしを締め直して出直してほしいね」というようなことを語っていた。

「ふんどしを締め直す」という考え方は一般社会でもよく言われることだが、相撲道の基本のひとつとしてきちんと指導してもらいたいものだと思う。これも重要な大相撲改革のひとつだと思うが・・・。

< 6 > 訳のわからぬ審判長の説明

物言いが付くと審判員が土俵に上がって協議をする。ビデオ画像による確認情報なども合わせて結論が出ると、審判長が館内放送で説明をする。お馴染みの光景ではあるが、ここ数場所で問題に気が付いた。

幕内の取り組みを担当する審判長として中村（元富士桜）、三保ヶ関（元増位山）、貴乃花（元貴乃花）などの審判長が登場するが、この中で貴乃花審判長の説明は「説明になっていない」と言う点で大変問題である。多くの審判長の説明は

「行事軍配はXXXに上げられましたが、YYYの体が落ちるのが早いのではないかと物言いがつき、協議の結果・・・・・・のためYYYの勝ちと致します」

と、「物言いが付いた経緯」「協議のポイント」「協議の結果」をきちんと押さえた説明がされることが多い。中でも三保ヶ関の説明は明快でわかりやすい。

ところが、貴乃花の説明は「ただ今の勝負についてご説明いたします」の後は最終的な勝者がどちらであるかという「結果だけ」しか喋らず、何の説明にもなっていない。

このことはNHKの実況中継アナウンサーも解説の北の富士さんも指摘しているが、相撲協会内部では問題視されていないようで、一向に改善されない。

以上